

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅療養支援診療所におけるがん終末期患者の訪問リハビリテーションの現状～骨転移を中心として
演者名	佐藤美希
所属	公益財団法人宮城厚生協会坂総合病院 リハビリテーション科

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		9

【目的】
在宅緩和ケアにおいて、骨転移を有する症例において、訪問リハが介入することで、ADL・QOL とともに改善する例がある。今回、爽秋会岡部医院での訪問リハビリテーションの現状を骨転移を中心に報告し、今後のがん終末期患者における訪問リハの課題を検討する。

【方法】
2014 年 1 ～6 月の新規介入した 166 名を対象とした。

【結果】
訪問リハ処方は 21 名で全体に 12. 7%だった。比較的予後が期待できる症例中心に処方されており、そのうち 8 名で骨転移が認められた。一方骨転移は全体の 34 名に認められており、そのうち 26 名にはリハ処方されていなかった。
リハ処方によっての在宅看取り率には差がなかった。
リハ処方された患者の骨転移部位は、脊椎 4 例、骨盤 4 例、下肢 1 例、肩甲骨 1 例、肋骨 3 例、全例複数骨転移が認められ、体幹中心に疼痛や基本動作障害などが認められていた。放射線治療が 17 名に施行されていたが、施行後早期退院例や、照射時期不明例もあった。

【考察】
本邦では全がん患者における骨転移の割合は約 10%と報告されているが、今回 38%と高く、骨転移例でのリハニーズの高さが認識された。一方、リスク管理については事前情報の不足もあり、特に放射線治療例では治療時期・経過の確認と、除痛効果・過負荷によるリスクの考慮を総合的に行うことが現場に求められた。